

第2節 陶磁器

出土陶磁器には青磁、白磁、南蛮（鉄釉・褐釉陶器）があり、表採品の中には若干の染付もあった。破片数としてはTab. 3に示した様に壺・甕類を主とした南蛮が多く、ついで青磁の出土が多かった。青磁は碗を主としており、白磁でも碗の出土が主であった。発掘地域内からは染付が全く出土しなかった点は注目すべきことである。また青釉（孔雀釉）などの他の遺跡では出土類例の少ない陶片も出土している。貝層中からも120点余りの青磁・白磁・南蛮類が出土しており、前述の如く貝層が一定期間の単一層であるという点から見て、これらの陶磁器類が一括遺物として考えられることは極めて重要であろう。以下にそれぞれの遺物について、まとめておく。

(1) 青磁

青磁は総数339点出土しており、そのうち95%以上が碗形である。その他、大皿片、小皿片が出土しており、日用器物として使用されたと思われるもののみであった。

碗は外面の文様及び見込（内底面）の文様によって細分した。Tab. 3はその結果である。胴部では外反か直立・内彎なのか不明の为一括した。やや退化した線彫り蓮弁文（H）としたものは、1cm以上の幅広い線刻蓮弁文（Fig. 9-9・Fig. 10-10）を指し、最も退化した線刻蓮弁文（I）としたものは、極めて簡略化した蓮弁文（Fig. 9-10・Fig. 10-9）を指している。但し、これらの中間的な形態に属する例（Fig. 10-7・11）等もある。また鑄蓮弁文からの退化形態と見なし得る蓮弁形態の線刻蓮弁文（Fig. 10-4・Fig. 11-8）を（G）のタイプとした。崩れたヘラ彫り雷文としたもの（E）はFig. 9-8・Fig. 10-6の様に口縁下にヘラで崩れた雷文を彫り、その下に簡単な蓮弁文を彫ったものである。これに対し、Fig. 10-8やFig. 11-6では整った形態を残しており、（D）タイプとして別に分類した。

見込の分類は、(1)無文のもの、(2)中心部無釉のもの、(3)花文スタンプのもの、(4)その他、(5)不明とした。外面の文様との関係を考える為、それらを上述の外面文様で細分してみた。

青磁碗の分類整理から判ったことは、該遺跡では無文外反で見込も無文の碗が最も多いこと。崩れた雷文とやや退化もしくは最も退化した線彫り蓮弁文の碗とは共伴し、ほぼ同率の出土を示していることである。これは貝層中出土のものみの比較でも同様である。またわずかながら、鑄蓮弁文碗片（Fig. 11-4）やその退化した線刻蓮弁文碗が出土していることは興味深い。特に貝層中からもFig. 9-7の様に鑄と言えないまでも立体感を残した蓮弁文碗片が出土していることは注意すべきであろう。Fig. 11-4は表採品ではあるが、完全な鑄蓮弁文碗である。通常、日本本土の出土例を見る限り、鑄蓮弁文碗の出土は13～14世紀前半代に集中して多く発見されていることは、よく知られている。しかしそれ以降の時代、例えば戦国

Tab. 3 出土陶磁器一覧表 (表採は含まず)

※()内は貝層出土の破片数

			A. 無文、外ハン	65(8)	
			B. 無文、直立もしくは内ワン	8(0)	
			C. 1~3条の沈線	4(1)	
			D. 整った雷文	0(0)	
		口 縁	E. 崩れたヘラ彫り雷文	15(1)	
		1 2 1	F. 鎬蓮弁文	0(0)	
		(15)	G. 線彫り蓮弁文	1(0)	
			H. やや退化した線彫り蓮弁文	7(1)	
			I. 最も退化した線彫り蓮弁文	8(1)	
			J. その他・不明	13(3)	
			A. 無文、外ワン	}11(2)	
			B. 無文、直立もしくは内ワン		
			C. 1~3条の沈線		0(0)
			D. 整った雷文		0(0)
		(1) 無文	E. 崩れたヘラ彫り雷文		0(0)
		1 8 (3)	F. 鎬蓮弁文		0(0)
			G. 線彫り蓮弁文		0(0)
			H. やや退化した線彫り蓮弁文		0(0)
			I. 最も退化した線彫り蓮弁文		1(1)
			J. その他・不明		6(0)
			A. 無文、外ワン	0(0)	
			B. 無文、直立もしくは内ワン	0(0)	
			C. 1~3条の沈線	0(0)	
			D. 整った雷文	0(0)	
			E. 崩れたヘラ彫り雷文	0(0)	
		(2) 見込無袖	F. 鎬蓮弁文	0(0)	
		4 (0)	G. 線彫り蓮弁文	0(0)	
			H. やや退化した線彫り蓮弁文	0(0)	
			I. 最も退化した線彫り蓮弁文	0(0)	
			J. その他・不明	4(0)	
		底部	A. 無文、外ワン	0(0)	
		3 8	B. 無文、直立もしくは内ワン	0(0)	
		(5)	C. 1~3条の沈線	0(0)	
			D. 整った雷文	0(0)	
			E. 崩れたヘラ彫り雷文	1(1)	
		(3) 花文スタンプ	F. 鎬蓮弁文	0(0)	
		3 (2)	G. 線彫り蓮弁文	0(0)	
			H. やや退化した線彫り蓮弁文	0(0)	
			I. 最も退化した線彫り蓮弁文	0(0)	
			J. その他・不明	2(1)	
			A. 無文、外ワン	0(0)	
			B. 無文、直立もしくは内ワン	0(0)	
			C. 1~3条の沈線	0(0)	
			D. 整った雷文	0(0)	
			E. 崩れたヘラ彫り雷文	0(0)	
			F. 鎬蓮弁文	0(0)	
			G. 線彫り蓮弁文	0(0)	
			H. やや退化した線彫り蓮弁文	0(0)	
			I. 最も退化した線彫り蓮弁文	0(0)	
			J. その他・不明	0(0)	
		(4) その他 0(0)			
		イ. 文 字			
		ロ. 双 魚 文			
		ハ. 万 字 状 文			

		(5) 不明 13(0)	A. 無文、外ワ B. 無文、直立もしくは内ワ } 2(0) C. 1~3条の沈線 0(0) D. 整った雷文 0(0) E. 崩れたへら彫り雷文 0(0) F. 鎬蓮弁文 0(0) G. 線彫り蓮弁文 0(0) H. やや退化した線彫り蓮弁文 0(0) I. 最も退化した線彫り蓮弁文 0(0) J. その他・不明 11(0)
	胴部 164 (22)		A. 無文、外ワ } 124(20) B. 無文、直立もしくは内ワ } C. 1~3条の沈線 0(0) D. 整った雷文 0(0) E. 崩れたへら彫り雷文 2(0) F. 鎬蓮弁文 1(1) G. 線彫り蓮弁文 0(0) H. やや退化した線彫り蓮弁文 } 18(1) I. 最も退化した線彫り蓮弁文 } J. その他・不明 19(0)
大皿 10(0)	口縁 9(0) 底部 0(0) 胴部 1(0)	A. 円形 4(0) B. 稜形もしくは波形 5(0)	
小皿 6(0)	口縁 6(0) 底部 0(0) 胴部 0(0)	A. 円形 4(0) B. 稜形もしくは波形 2(0)	
鉢 0(0)			
その他 0(0)			
II. 白磁 20 (4)	碗 17(3) 底部 2(1) 胴部 9(1)	A. やや外ワ 6(1) B. 直立もしくは内ワ 0(0) (1) 無文 1(1) (2) 蛇ノ目 0(0) (3) 花文 1(0)	
	小皿 1(0) 胴部 0(0)		
	その他 2(1)	鉢 1(0) 不明 1(1)	
III. 南蛮 516 (74)	壺・甕類 516 (74) 口縁 18(3) 底部 28(10) 胴部 470(61)	A. 玉縁口縁 7(1) B. 肥厚口縁 1(0) C. 逆L字形口縁 5(1) D. ラッパ状口縁 5(1) E. その他 0(0)	
IV. その他 1(0)			

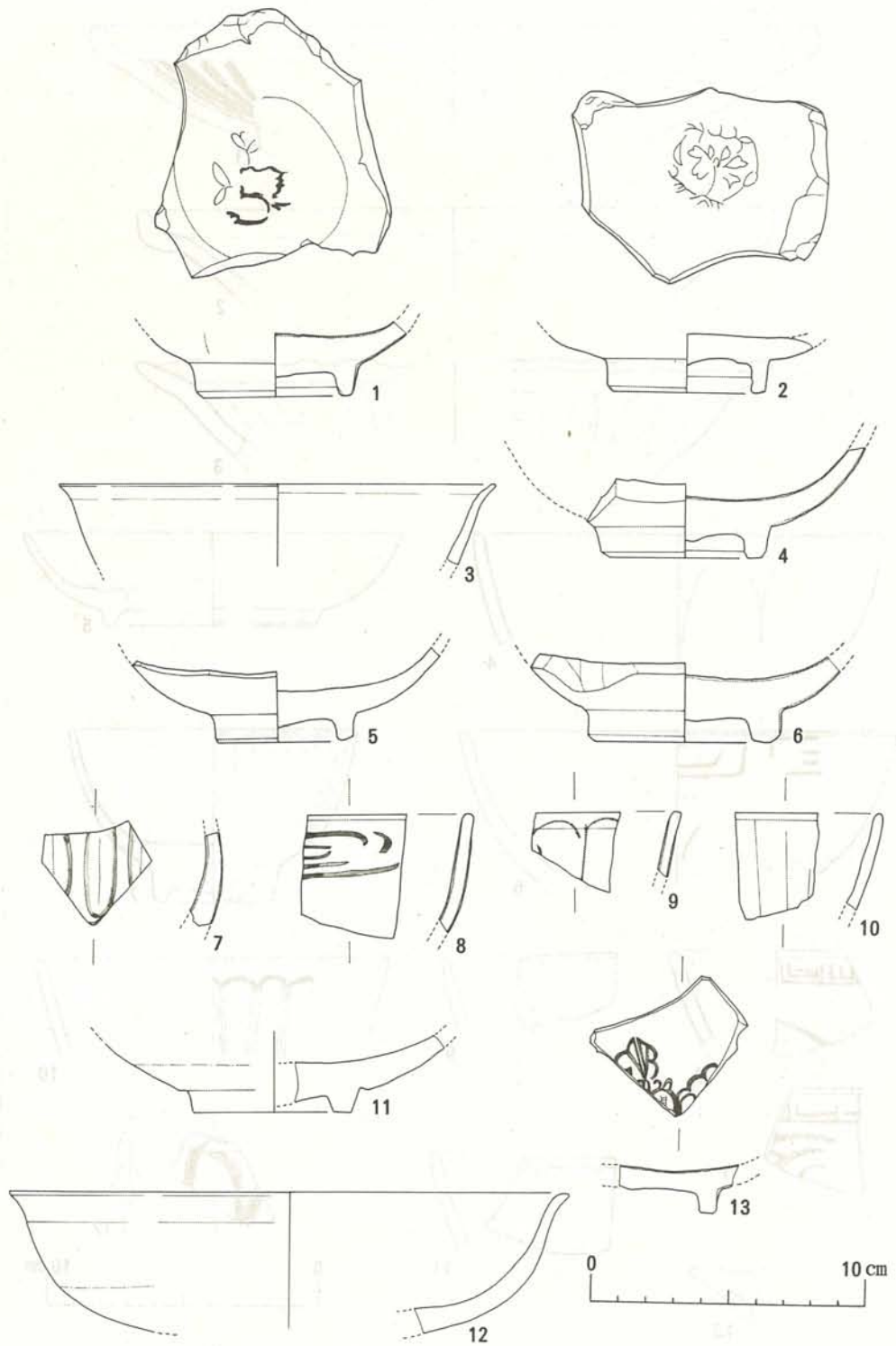


Fig. 9 青磁・白磁実測図

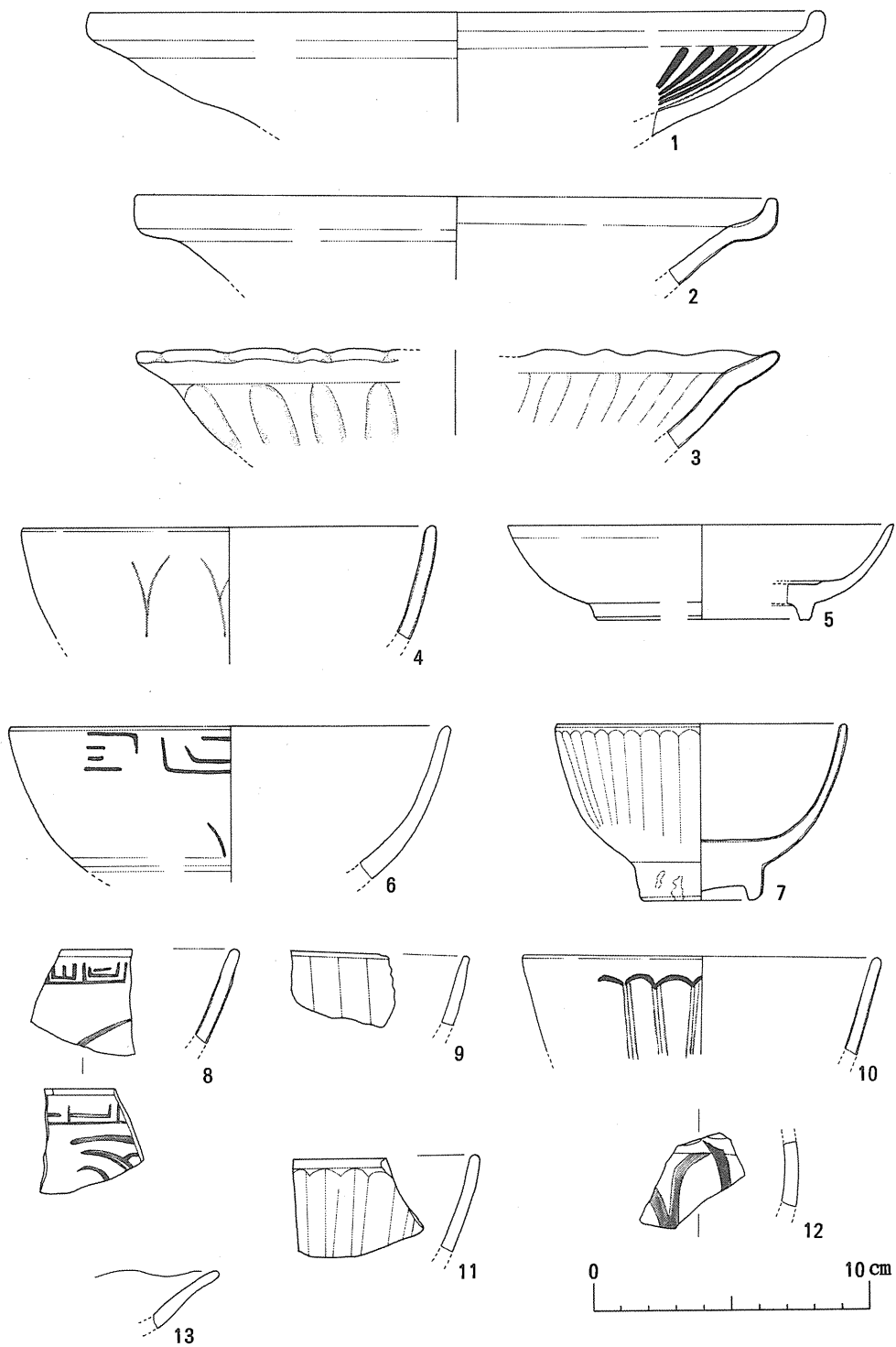


Fig. 10 青磁実測図

期の城郭跡からの発見例もしばしば認められ、その様な場合、城郭の初源を13～14世紀代に求めたり、当時の伝世品として扱われてきた。恐らく、そうした報告の多くは、それなりに正しいのであろう。該遺跡の場合も、遺跡の初源を13～14世紀に求める考え方も出来るが、そうした時期の遺物が余りに少な過ぎる。それ故に伝世品として考えることも出来よう。しかし、他の青磁と同一時期に搬入・使用されたものとも考えることも可能なわけである。石垣島では、鍋運弁文の類を主として出土する遺跡、言い換えると13～14世紀の遺物を主として出土する遺跡は、現在まで皆無である。断片的な出土かも知しくは明代の遺物に混入して発見されていることが多い。⁽¹⁾ こうした事情から勘案すると、消費遺跡に於ては、相当長期間、古いタイプの青磁類も搬入・使用されていた可能性もあると思うのだが、如何であろうか。⁽²⁾ 今後の課題として、13～14世紀を中心とする遺跡を八重山群島内で探すと同時に、上記の様な可能性をも充分検討してゆく必要がある。

青磁ではFig. 10-1～3に示した様な大皿の出土もある。これらは一見しただけでは元代に溯る様な古いタイプの青磁に間違える。しかし、器壁が薄く、釉のかかりも大変薄く、より量産化された大皿である点は時代的に降ったことを感じさせる。他の一般的な青磁碗と同一時期の生産品であると考えられよう。ちなみに名蔵湾シタダル遺跡⁽³⁾の一括遺物では碗・皿のタイプは極めて画一的で単調な製品であるが、大皿や大鉢の類は釉のかかりも厚く、一見して上手の感を与え、古手のものとの識別が困難である。今後、大皿類の時代判定は特に注意して行く必要がある。

青磁類の個別的報告はTab. 4にまとめてあるので参照されたい。以下に述べる白磁・南蛮についても同様なので参照されたい。

(2) 白磁

白磁は総数20点出土している。碗が大部分で17点(85%)で、小皿1点、鉢形1点その他不明のもの1点という内訳である。

白磁碗の形態はほぼ画一的でFig. 9-11に示した様な高台形を呈し、胴脇以下底部まで無釉である。またFig. 11-1に示した様に外反する口縁形態を示す。Fig. 9-12も同形・同胎土・同釉色を呈するが、口径が大きく鉢形とした。Fig. 9-11と12の白磁碗・鉢は貝層中からの出土品である。この種の白磁碗は沖縄全島からしばしば発見されており、時として見込に細線彫りの文様(暗花)が施された例がある。しかし、該遺跡の出土品中には、そうした例は見られなかった。

Fig. 11-2に示したものは白磁小皿で、所謂割高台の小皿で、重ね焼きの為、高台を割り下の器物との接着面を小さくして、量産に便ならしめた器形である。量産品の割には出土数が少ない。名蔵湾シタダル遺跡の場合と比較して大きく異なる点である。またシタダルでは該遺跡出土の白磁碗タイプの出土はない点も異なる。割高台白磁小皿が大量に採集されるシタダル

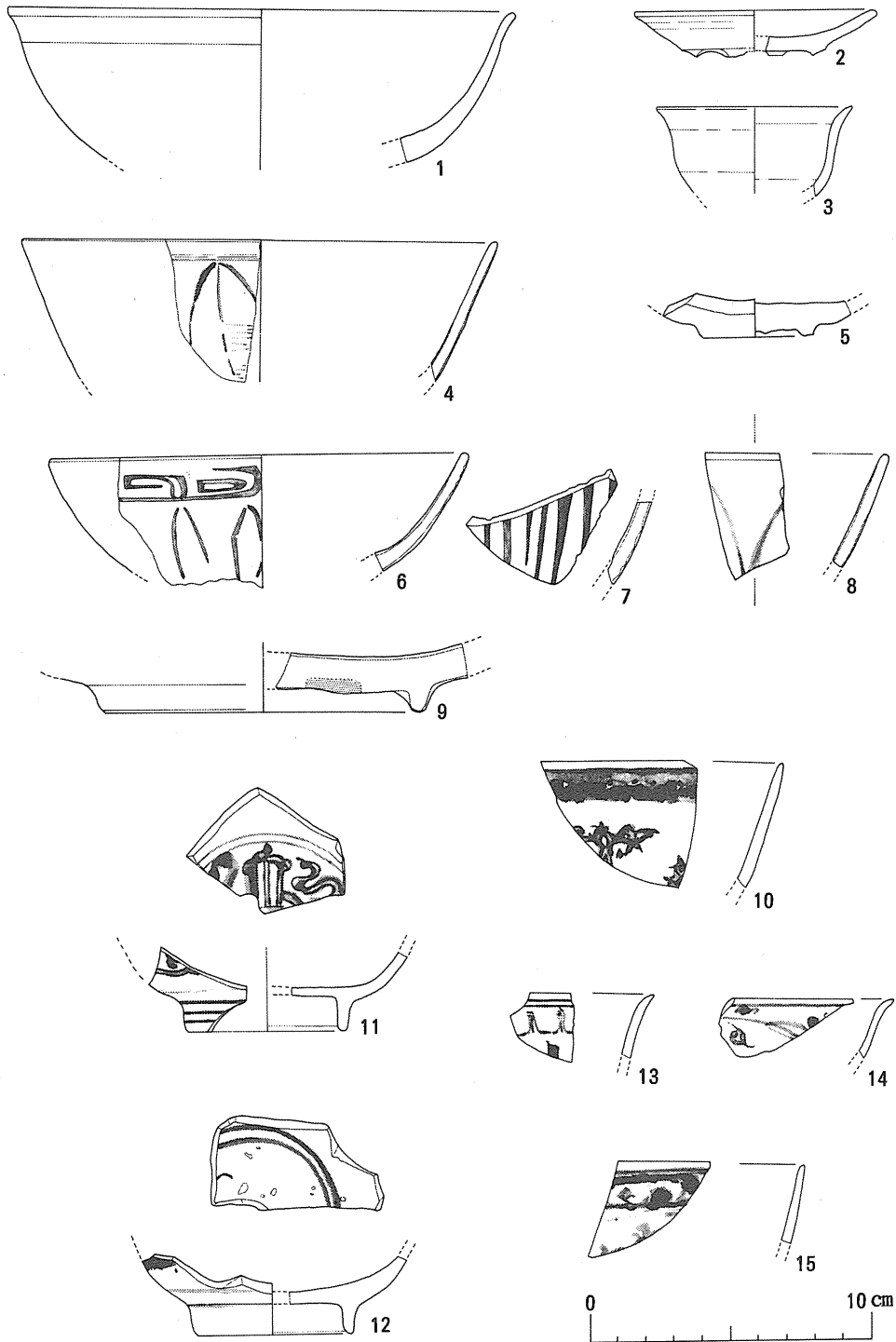


Fig. 11 白磁・青磁・染付実測図

遺跡の性格が消費遺跡でなく沈没船などの可能性の強い特殊な遺跡であることによる相違と考えられよう。

Fig. 11-3は胎土・釉色・光沢などの点で他の白磁類とは異なる感を与える白磁小碗である。

(3) 南蛮類

南蛮類とするものは施釉された壺・甕類の焼物を一括して総称したものである。釉薬は鉄分を多く含む為、褐色、茶色、茶黒色などの色調を呈し、胎土は石粒を多く含む荒い土で、個体差も大きい。焼成は堅固で、よく焼締められたものが多く、陶器とするよりも炆器に近い感じもする。成形技法は巻き上げ轆轤によったものが多い。釉色・胎土では個体差も大きく、分類基準としにくく、技法上からも全て同一技法によっていることから分類基準としづらい。そこで口縁形態に着目して細分類した。

南蛮類は総数516点出土しており、出土陶磁器の58.8%余りを示す。口縁形態から見ると四種に大別し得る。即ち、(A)玉縁口縁とする形のものでFig. 12-2・3に示す様なタイプである。(B)肥厚口縁とする形のものでFig. 12-4に示す様なタイプ、(C)逆L字形口縁とする形でFig. 12-1・6に示す様なタイプ、(D)ラップ状口縁とする形で、Fig. 12-5の様なタイプのものである。このうちA類の玉縁口縁の出土が最も多く、壺形となり肩に横耳の付く形であり、大小がある。この形態は清朝期まで存続してゆくもので、福建地方の産とされる清朝期の壺に見られる。A類の南蛮は沖縄全島で一般的に見られる。

B類の肥厚口縁とした南蛮は、やや厚手で甕とした方が適切な形かもしれない。底部も厚手であるが、凹状になっており、時として底面にも釉がかかり、口縁に「目」跡あるいは剥離痕を有するものがある。このことから口縁と口縁を合わせて、重ね焼きしたことがわかる。口縁は堅固にする為、突帯を貼付したものである。該遺跡での出土は大変少なかった(1点)が、沖縄の中世遺跡ではよく見られる形である。

C類の逆L字形とした南蛮は、分類基準として、必ずしも充分でなく、細分類もし得る。ちなみにFig. 12-1と6とは異なるタイプの南蛮であるが、一応同一形態の中に組み入れておいた。Fig. 12-1は胴部が玉子形をし、釉色も褐釉であり、古式の感が強い。出土件数も唯一点であり、沖縄本島今帰仁城跡採集品の中に類例があったと記憶しており、石垣島内では、ほとんど見かけないタイプの南蛮である。Fig. 12-8の耳も同一系統の南蛮の縦耳で珍らしい。Fig. 12-6のC類はごく一般的に見るもので、カンドウ原遺跡⁽⁴⁾、平得仲本御嶽遺跡⁽⁵⁾などからも出土している。

D類としたラップ状口縁の南蛮は、ごく一般的に見られ、上記遺跡の他、ヤマバレー遺跡などにも見られる。

該遺跡では結局沖縄で明代の青磁類と一般的に伴出してくる南蛮の全てを出土しており、貝

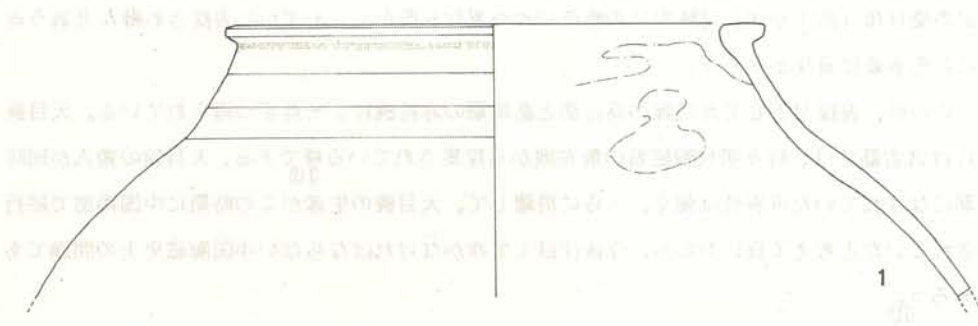
層中であってもB類を除いて、全種出土していることがわかる。Fig. 12-1の南蛮がより古い時期からあり、またA類タイプの南蛮は長期間存続してゆくことは納得出来るのだが、他の形態の南蛮類の先後関係を問うことは、沖縄産の南蛮の発生とも関連して、なお今後の課題とせねばならない。

沖縄で一般的に見られる南蛮類が、東南アジア各地で出土してくるものと同一であるか、と言うとどうも疑問がある。時代・地域により相当の違いがある様で、フィリピン・インドネシアなどでmartavaniと総称されている壺・甕類のうちで、竜文を貼付した様なタイプ（これをDragon Vaseと呼ぶ）、あるいは広東省仏山市石湾鎮⁽⁶⁾で焼成したと言う花文スタンプの類などは、沖縄ではほとんど認められていない。しかし、PL. 15に示したものはK-5グリッド及び表採の褐釉が施された南蛮で、スタンプされた竜文貼付が認められる。これは沖縄のみならず日本では極めて稀な出土例と思われる。南蛮は所謂パッケージであったのであるから、流通の問題を考える場合、大変重要な研究課題となってゆく。しかし、説得力のある研究は未だなされていないので、⁽⁷⁾これも今後の研究を俟つことにより沖縄出土の南蛮類の位置付けをしてゆかねばなるまい。

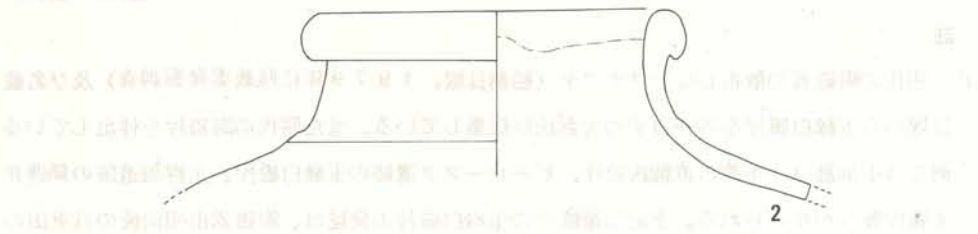
(4) 青釉・染付・その他

Fig. 12-10に示したものは青釉あるいは孔雀釉（翡翠釉）と称される濃青色の透明釉の施された袋物の破片である。かつて同種の青釉が一点表採されている。この種の焼物は磁州窯系の窯で元時代頃生産されたと考えられてきたが、最近では東南アジア各処で青釉が発見され、時代幅も明代全般に亘って存在する様で、中国南部でも、この青釉を生産していた可能性が強まっている。この一片の青釉も恐らく中国南部のどこかの生産物と考えられよう。

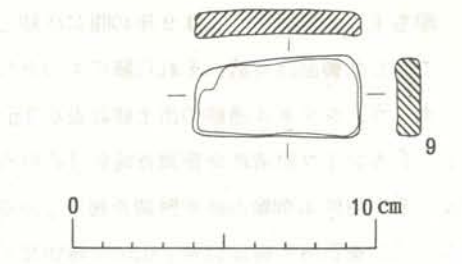
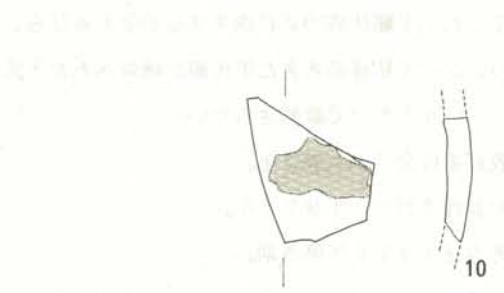
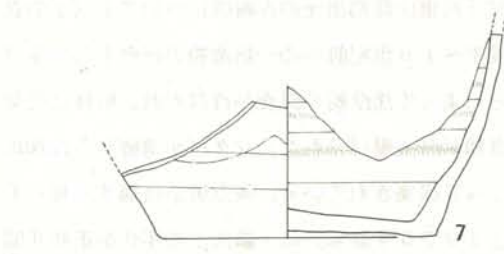
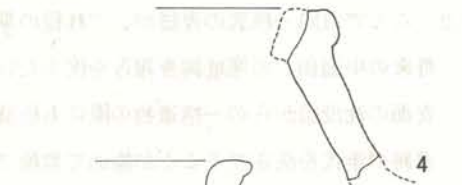
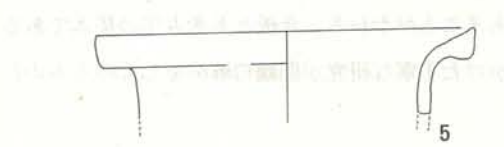
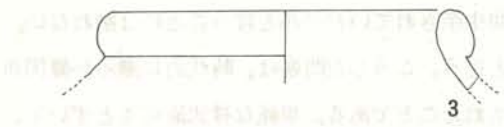
染付類は発掘区域内からは全く出土しなかった。Fig. 11-10~15に示した染付碗片は、全て表採品で、発掘地点よりも南側（山手方面）からの採集が多い。今までに10数片採集されている。これらの染付片は大概、形態・呉須のコバルト色調・文様などに共通する点が見出され、嘉靖（1502年-1566年）前後の製品と考えて良いものである。⁽⁸⁾シタダル遺跡でも折枝梅花文や捻り菊花文を碗中心部に描いた染付片が20点程（全体から見ると極めて微量）採集されている。ヤマバレー遺跡（元桴海遺跡）の住居跡では、こうした嘉靖期の染付及び万曆初め頃の染付と思われるものと仲筋貝塚出土と同タイプの青磁類が伴出している。ヤマバレー遺跡の報告にも言う様に同遺構の存続期間が長いとの見解もあるが、少なくとも仲筋遺跡出土の青磁類と嘉靖タイプ染付（実際には15世紀後半には出現していたものか？）とは連続・重複した関係で使用されていたことは明らかであろう。沖縄の他の中世遺跡でも、また本土の16世紀の遺跡でも、雷文や細線刻蓮弁文の青磁碗類や嘉靖タイプの染付類は伴出する例が多く、両者の接点が明らかでなかった。ところが、該遺跡の場合（名蔵シタダル遺跡でも同様）、まさにその接点を示す遺跡であり、前述した様に貝層中のみならず、発掘地区内からは全く上



〔水立 白濁〕



〔水立 白濁〕



0 10 cm

Fig. 12 炉器・青釉实测图

記の染付類は出土せず、遺跡内での地点のやや異なる所から、わずかに表採され得たと言う点にこそ重要な意味があるろう。

この他、表採品として天目碗の高台部と嘉靖期の赤絵碗片が一点ずつ得られている。天目碗片は宮古島では、時々明代陶磁器の散布地から採集されている様である。天目碗の搬入が同時期になされていた可能性は強く、さらに飛躍して、天目碗の生産がこの時期に中国南部で続行されていたと考えて良いものか、今後注目してゆかなければならない中国陶磁史上の問題でもあろう。(11)

(関口 広次)

註

- (1) 明代の陶磁器の散布しないフナクヤ（船越貝塚、1979年に県教委発掘調査）及び名蔵貝塚から玉縁白磁片を各一点ずつ大浜氏が採集している。また明代の陶磁片を伴出している例では小浜島コーキ湾の黄釉鉄絵片、ビーロースク遺跡の玉縁白磁片、元桴海遺跡の鎬蓮弁文碗片等々が挙げられる。上記二遺跡での玉縁白磁片の発見は、陶磁器出現前後の八重山の歴史を考える時、非常に重要な内容を含んでいるものとする。
- (2) ここでは同一様式の青磁が、どれ程の期間生産されていたのかということには触れない。将来の中国側での窯址調査報告を俟ちたいと思う。こうした問題は、時代的に溯るが韓国新安面の沈没船からの一括遺物の際にも指摘されたことである。単純な様式論にもとずいて、遺跡の年代を決定することが極めて危険であることがわかる。今後とも考古学の基本である層位的・統計的データを重視して、時間をかけた丁寧な研究が問題の解決をしてゆくものと思う。
- (3) シタダル遺跡については、かつて筆者らが「八重山群島出土の古陶磁について」（『物質文化』31、1978年）の中で15世紀後半～16世紀前半の一括遺物の好例として挙げた。1980年にはジョージ・H・カー氏らによって沈没船の探査が行なわれ、船体は発見されなかったが、海中より500点程の青磁類が引き揚げられた。シタダル遺跡からは顧氏銘をスタンプした青磁碗も最近、大浜氏によって採集されている。陳万里が指摘する様（『中国青瓷史略』1972年・『瓷器與浙江』1975年参照）に「顧氏」の年代が正統年間即ち1436年～1449年の間に活躍していた名工顧仕成の名に由来するのであるなら、こうした製品は当然、それ以降のものとなり、かつて私達の考えた年代観が補強されたと言えよう。シタダル遺跡の出土統計表をTab. 5に示したので参照されたい。
- (4) 『カンドウ原遺跡発掘調査報告』石垣市教育委員会 1977年。
- (5) 『平得仲本御嶽遺跡発掘調査報告』沖縄県教育委員会 1976年。
- (6) 「広東石湾古窑址調査」仏山市博物館『考古』1978年第3期。
- (7) Eine Moore 'A suggested Classification of Stonewares of Martavani Type' "The Sarawak Museum Journal" 1970 が詳細に検討した論文だが、分